

## 《中日大辞典》の出版にあたって

鈴木 擇 郎

—

「中日文化交流のため改めて日本人民に贈る」という中国の好意ある特別なとりはからいで、中日辞典資料カードがとどけられ、愛知大学で編纂がはじめられたのは昭和 30 年 4 月であった。

その後、愛知大学では中国語担当教授の外に、さらに中国人 1 名を含む数名の中国語専門家を専従者として聘して編纂業務を進めていたが、13 年を経た現在（43 年 1 月末日）ようやく出版のはこびに至った。

この辞典の規模は B6 版、本文 1,947 頁、検字表 85 頁、日本語による索引 68 頁、その他付録など合計 2,144 頁となった。親字は簡化字 2,238 字を含めて計 7,876 字であり、繁体字・異体字 3,317 字をも併載してある。語数は約 12 万語となった。

本辞典では語彙は漢語拼音方案によってアルファベット順に排列してある。親字・見出し語はなるべく説明を詳しくし、事典的のものも多くし、例文もなるべく多くとり入れてある。

1995 年以後の文字改革による一連の変革は全部とり入れられている。すなわち、①漢語拼音方案は勿論全部とり入れ、分かち書きがしてある。②簡化漢字は全部とり入れてあり、同時に繁体字・異体字も併載してある。③異読字は“普通話異読詞三次審音総表初稿”を完全にとり入れ、従来の異読音は親字のところに審定音とならべて“一”で区切って細字で示し、対照してある。

方言は普通話への過渡段階にあると思われるものは勿論、新聞や文芸作品などにあらわれるものも採録されている。使用地域の明らかなものには [京] [東北] [西北] [広] などの符号をつけて、それぞれ北京・東北・西北・広東地方の方言であることを示し、通用地域の判定しがたいものは単に [方] とした。元・明の古白話はその専門辞書にゆずることとし、ごく少数を収録するにとどめた。

地名は原則として中国地名はとらない。外国地名はアフリカの新興国に至るまで全世界の国名・首都名、さらに若干の主要都市名を収録した。人名は歴史的な人物をごく少数収録した。国際的新聞社・通信社名は収録した。それらはいずれも本文中にとり入れてある。

軽声は 3 段階に分け、①場合により軽声となる程度の軽声音節には、そのつづりの前に「●」を付し、[摆脱] bāi●tuō、[成就] chéng●jiù、[推辞] tuī●cí の如くした。②常に軽声に発せられるが、その漢字本来の意義を失っておらず、話し手もきき手も、意識の中では声調が失われていないと思われるものには、そのつづりの前に「・」をつけて〔錯

誤] cuò · wù、[打听] dǎ · tīng、[预备] yù · bèi とし、③常に軽声に発せられる音節のうち、よく用いられる少数特定のものについては、そのつづりの前に「・」を付し、声調符号はつけない。すなわち語気詞・接尾詞や重畳詞の第二字・複音単純詞の軽声字などで、[了] · le、[的] · de、[呢] ne ·、[们] · men、[儿] · er、[子] · zi、[头] · tou、[衣裳] yī · shang、[葡萄] pú · tao の如くした。

## 二

検字表は、①旧来の 214 種の部首とその約束ごとにこだわらず、なるべく見た感じによって検字できるように、243 種の部首を設定した。②部首はあたらしい字体にもとづき 5 起筆、すなわち、てん 丿、よこ 一、たて 丨、はらい ノ、折れ ㇇の筆順で画数別に排列してある。

この二つの原則によって、次のような配慮がなされて、検索がたやすくなった。①見た感じで二つ以上の部首に入れておく方が検字に便利であると思われる字は、できるだけそれぞれの部首に重出させた。たとえば、反は 又、ノ、一 の 3 部首に、克は 十、儿の 2 部首に重出させてある。②画数のまぎらわしい字は、多少まちがっても引けるように、できるだけ重出してある。たとえば、肺は月の 4 画、5 画に、極は木の 3 画、4 画に重出させてある。③比較的画数の少ない字で、どの部首に属するか判断のつきかねるような字や、習慣上 2 通り以上の筆順がある字は、できるだけ 丨、ノ、㇇の各部に重出させてある。たとえば、为は 丨、力 の 3 部首に、凹は 丨、丨、丨 の 3 部首に重出させてある。④日本当用漢字字体には△を付して重出させてある。たとえば、反は 又、厂、一 の 3 部首に重出させ、辞典本文の〔反〕に導いてある。

日本語による索引 68 ページ、約 1 万 7 千語を巻末に加え、正面からひく「中日」の用法と逆の方からひく「日中」の用法とを兼ねたものとし、この辞典を効率的のものとした。

附録としては日本語索引以外、次のものが掲載されている。

部首名一覧 日中字形対照表 偏旁簡化表 主要量詞一覧 中国政治機構一覧表 中国重要記念日・二十四節気・旧暦主要節日一覧表 親族関係表 北京傳統住宅図解 度量衡比較表 化学元素表 中国略図

## 三

当初発足の際は、完成期は大体 6 年後の昭和 36 年 3 月をめやすとしていたが、これはたいへんあまい考えであった。なんせ、取組んだ相手は外国語である。一語を採るにも捨てるにも、その判断は容易ではなかった。親字一字、見出し語一語を解説するにも多くの時間を費やすこともあり、一植物名の中日文献の不一致を追及して予期しなかった多くの時間を費やしたり、また専従者も授業の負担を負わされたり、もろもろの原因のため、当初

の見込みは大きくはずれてしまった。

完成期の見込みが大きくはずれて長びくと、中国で「夜長夢多」という如く、いろいろな雑音が入って来る。世間では「あの辞典はどうしてしまった」というし、学内からも「いつできるのか」といわれるし、甚だしきは、「とてもできないからやめてしまえ」という声さえ出たらしい。愛知大学名誉学長本間喜一氏はこの事業を愛知大学の事業とするまでにとり運んだ人であるが、毎年の予算会議にも姿勢を低くしなければならなかったらしい。一方、そろばんに合わないこの事業は出版社からは敬遠され、愛知大学が出版費を出してくれるかどうか未定であった。この一時期は、われわれにとっては雪もよいの空のような時期であった。しかし、われわれ編纂員の責任はよい辞典の原稿を早く仕上げることであった。暗い気持ちをひきたてて、作業開始以来やって来たように、夏休みも冬休みも返上してカードと首引きであった。

39年になるといよいよ完成のめどがついた。あたかも41年11月は愛知大学創立20周年になるので、愛知大学は記念事業の一環としてこれをとり上げることになり、印刷費の半分あまりを保証してくれることになり、日通社長福島氏、朝日新聞社、毎日新聞社が大部数の前金予約をしてこの事業を援助して下さったので、この辞典は陽の目を見ることとなった。雪もよいの空はたちまち快晴となった心地であった。中日大辞典刊行会は印刷・出版に関する一切の業務を株式会社大安に依頼した。

以上のような曲折を経て、印刷に2年6ヶ月を費やし、この辞典は世に出ることになったのであるが、果たして世間の期待に副うことができたかどうか、中国のご好意に報い得たかどうか、自らかえり見て不安なきを得ない。

---

〔注〕「大安」1968年2月号 所載。「大安」は中国書専門店株式会社大安発行の月刊書籍目録。

## 中日大辞典の思い出

鈴木 枳郎（愛知大学教授十五期）

中日大辞典はいつ頃、どうして完成し出版するかというはつきりした見とおしはなく、ただ、できるだけのことをやっておきさえすれば、必ず何とかなる、という漠とした自信だけであった。仕事は各自井上中辞典一冊を持ち、中国人にはそれに出ていない語いを補ってもらい、われわれ日本人は文献から語いをとるというところで始った。いかに中国人でも「憑空想」ということでは、そうたくさん思い出せるものではないので、いずれは遠からず行き詰るはずであった。この仕事をはじめたのは昭和八年頃であったと思うが、時局は日中戦争の泥沼へ踏みこんだところで、中日合作に基盤を置いたこの仕事は大影響を受けざるを得なかった。中国人講師は漸次姿を消し、日本人教員も若い人達は召集を受け、この仕事は長い間、断続し停顿せざるを得なかった。それでもこの仕事に目をつけた東京の出版社があつたのだが、成果はまだ到底出版などできる段階ではないので、出版可能な状態になったとき改めて相談するということにした。

終戦時、敵産として中華民国に接収されたときは、新しく加えられた語いはあまり多くはなかったと思うが、井上辞典以外の辞典からも切貼りをしたのでカードは約十四万枚になつていた。接収に來た委員はその後ソ連へ出張の際飛行機事故で死んだ有名な文学者鄭振鐸氏であつた。カードは二人で動かすには重すぎるほどの木箱三個に詰められていた。これを引渡すときにわたしは、「将来、もし事情が許すようになったら、われわれにこれを完成させてもらいたい」旨を要望しておいた。

これで見るとやはり引渡すのは惜しかったのだと思う。しかし、敗戦は絶対的のものだからあきらめ易かつた。また、自分の責任ではなくてこの責任から放免されたわけで、心の奥ではほっとした気持ちもあつた。

こうしてすっかり忘れていたのであつたが、昭和二十八年頃、書院大学最後の学長、当時の愛知大学長本間喜一氏、元書院教授、当時愛知大学教授（後に学長在任中死亡）小岩井浄氏らの熱心な慫慂があり、辞典原稿カードの返還を願ひ出ることになつた。わたしとしては接収という不可抗力によつて免罪となつていたのであるが、もし万一このカードが返還された場合にはあたかも前科を追及されるような具合になり、改めて責任を負わされることになるのであつた。しかし、このような話が出た以上、それを実施するのもまたわたしの責任であつた。それで日中友好協会理事長であつた内山完造氏を通じて中国科学院長郭沫若氏宛に辞典カードの返還を願ひ出たのであつた。同氏の御斡旋により「日中文化交流のために改めて日本人に贈る」という異例な取扱いで、昭和二十九年十二月引揚船興安丸托送で日中友好協会へ送り届けられた。同協会では元の関係者を召集して協議の上、この仕事を完成する熱意を有している愛知大学へ引渡して完成させるということに満場一

致で決定し、現物は三十年一月愛知大学へ届けられた。滬友会幹事会はこのことを「愛知大学の強盜的行為」であると全員一致で決議したのであった。その後、ある二名の同窓がこのカードを東京へ引取って完成したいと執拗に要請して来たが、それは完成の責任を負っている愛知大学として認められるはずもなかった。

この仕事の完成はもとより相当な経費を要することである。貧弱な愛知大学の財政から支出することに決定するには、評議会説得には本間先生が苦勞されたことであろうが、結局、この辞典の編纂は愛知大学の事業としてやるということが承認された。

さてこの有意義ではあるが、また困難である事業は、いったいどれだけの人員で、何年かかるか、編纂費がどれだけいるのかも見当がつかない。しかし先ず編集員を確保することが第一要件である。最先に招聘されたのは几帳面で誠実で、これ以上適任者はなからうと思われる三十四期の内山雅夫君（前東亜同文書院大学予科教授）であった。次に中国人一名は元書院専門部講師歐陽可亮氏夫人張祿沢女士（北京・中国大学国文系卒業）を台湾から招聘し、さらに愛大文学部中文専攻卒業者今泉潤太郎君を加え、これらの人を専従者として昭和三十年四月一日を以って、中大辞典編纂事業を発足した。その後、東北大学文学部中国文学科特別研究生終了の志村良治、愛大法経学部卒の杉本晃、書院十五期宗内鴻、十九期遠藤秀造の諸氏を迎えて編纂陣営を充実した。わたしと桑島信一君は兼務で、できるかぎり尽力することになった。

これらの人々は申訳ないような待遇で来てもらったのではあるが、兎に角人件費は必要なのであり、この外、資料費なども相当必要なので、相当額の予算が必要であった。

また、その時は中華人民共和国成立という大変革があり、この仕事には、その資料を取り入れるという仕事があるので、その完成期は全く見当がつかなかった。最初は先ず六年で完成するという見当をつけて見たが、その六年が経過しても完成期は漠として確定し難かった。

いよいよ印刷にかかったのは昭和四〇年四月であった。最初は一年くらいで一切を完了し得るだろうと思っていた、校正も専門家および部外者多数にお願いしたに拘わらず、一頁三千五百字、本文一、九四七頁、索引および附録一七六頁という分量なので、印刷のために二年十ヵ月を要した。辞典を一つ作ると、からだをこわすとか失明するとかよくあるものと驚かされていたが、幸にして大体無事にすんだ。

### 難航を極めた出版費の調達

しかし、苦勞は印刷業務に在るのではなく、出版費の調達であった。これについては本間先生が奔走して下さった。そのうち二つの大出版社は同様な計画を実施中だからということでことわられた。そのうちの一本は前述の上海で交渉のあった出版社である。さらにもう一つの出版社は、いよいよ原稿のでき上った時点でまた相談しようという好意的なものであったが、原稿脱稿時にはその社長はすでに物故しており、その後継者はこの辞典の

価値を理解しなかったか、あまり興味を示さなかったものでそれまでとなった。また、この数年前愛大教授のうちに、叔父がある財団に関係して居り、その財団はこのような文化事業には相当援助してくれると思うからとて、紹介して下さったので、わたしは本間先生といっしょにその方を訪問した。その方はたいへん好意を持って他の幹部に紹介して下さいただ、充分な理解をいただけず、不成功に終わった。

さらに滬友関係では名古屋の磯部鎌一氏（十九期）はたいへん心配して下さい、この事業は何とか滬友の力で出版を実現させたいとの熱心な御配慮があり、多賀二夫氏（六期）は教育事業や文化事業には理解のある方だから、出版費を出して下さいようお願いしようという事で、わたしは磯部氏に案内されて多賀氏にお目にかかった。多賀氏は好意を以って考慮して下さいただ、印刷会社の見積書を見て、金額の桁がちがうので力が及ばないから悪しからずとのことであった。

愛知大学の内部でさえも、この辞典について認識が浅く、出版費の大学負担はたやすくは決定されなかった。そのうちに本間先生の方で偶然ある人を通じて日通福島社長からまとまった数量の予約をし、予約金を現金で渡すという話合いができた。さらに朝日、毎日両新聞社および中国貿易友好商社から予約してもらい、その部分は中国の駐日貿易弁事処を通じて中国へ寄贈することになり、これも予約金が入ることになったので出版に踏み切ることができた。またこの時は恰かも愛知大学創立二十周年に当るので記念事業としてとり上げるといふことになり、出版費の半額を保障し、更に必要金額は貸与し立替払をするといふことになり最後の難関を突破することができた。わたしはいいものさえ作っておけば何とかなるといふ呑気な考えを持って居ったものの資金調達の能力はゼロなので、資金調達は一切本間先生にお願ひし、お骨折りを願っていたのであった。

かくして、兎に角「中日大辞典」はでき上った。幾多の欠点はあるが、また一定の評価も得ている。これで特別の取扱いで原稿を返してくれた中国、いろいろ御幹旋をいただいた日中友好協会、物心両面において何くれと御援助下さった多くの人人の御好意に対し、一応のおこたえができた、やや心に許すことができたのは幸であった。特に本間先生は書院最後の学長として書院大学に関係ある終戦処理の最後のものを完了したわけであり、愛知大学の責任者としては、愛知大学の事業としての辞典編纂を完成し、日本人の附託にこたえることができたわけで、この辞典の出版のためには老躯をいとわず奔走して下さいだったので、この辞典の出版を何人にもましてよろこんで下さった。そしてわたしも肩の荷をおろすことができた。

今後は「日進月異」の中国の進展に応じてどのように増改訂をするかが将来の苦労といふことになる。

## 中日大辞典の編纂と思い出

第十五期 愛知大学名誉教授 鈴木枳郎

### 一、中日大辞典編纂の発端

わたしの学生時代には、中国語学習でお世話になった書物は、華語萃編初集、官話指南、談論新編等教科書と岡本正文氏の支那声字彙以外には何もなかった。西欧語を学ぶにはそれぞれ立派な辞書があるのが羨ましかった。ジャイルスの中国語辞書はあつたはずだが、われわれの目には触れなかった、目に触れたとしても高嶺の花だったろう。

その後、わたしは母校に奉職し、翹望しながらついに得られなかった中国語辞典を編纂するのに可能な環境に置かれたのであつた。わたしは大胆にも中国語辞典の編纂を提議して同僚諸君と、母校当局の賛成を得、支那研究部の事業として中国語辞典編纂を充足した。その時は昭和八年であつたと思うが記憶ははっきりしない。編集の仕事が目途のつけられる程度まで進まないうちに、時局は不安を増し、日中戦争は泥沼に踏みこみ、編纂事務もほとんど停頓状態にあつた。

昭和十五年頃だったろうか、三省堂上海支店からこの中日辞典の出版について話があつたが、まだその可能な状態まで進んでいないので、時期到来したら相談するということにした。

### 二、敗戦による原稿カード接收とそれの日本人への贈与

日本敗戦のとき、東亜同文書院大学のあらゆる財産は、公有私有を問わずすべて中華民国政府によつて敵産として没収され、われわれの中日辞典原稿カードも勿論没収された。

この原稿カードを接收委員鄭振鐸氏（著名な中国文学者）に引渡したとき、「将来、もし事情が許すようになったら、われわれにこれを完成させてもらいたい」旨を要望しておいた。とはいふものの敗戦という絶対的理由によるものだから、返還などは考えられず、また自分の責任ではなくて辞典完成という責任から放棄されたわけで、心の奥ではほっとした気持ちもあつた。

終戦後約十年、元東亜同文書院大学長、愛知大学長本間喜一氏の熱心なる徳憑があり、同氏名義で、日中友好協合理事長内山完造氏に依頼し、中国科学院長郭沫若氏を通じて中華人民共和国政府へ原稿カードの返還を願い出た。目的のそのカードは幸いにして完全に保管されて居り、「中日文化交流のため改めて日本人に贈与する」との主旨で、日中友好協会の窓口を通して日本人へ実質上返還されて来た。日中友好協会は、この辞典の関係者のほぼ全員を招致し、処置が議せられた。協議は全会一致で「この辞典の完成に熱意と能力とのある愛知大学へ引渡して完成せしめる」ことに決定された。愛知

大学はこの決定に基づいて昭和三十年四月から中日大辞典の編纂を発足した。

### 三、編纂業務の進行

さて有意義ではあるがまた困難であるこの事業は、いったいどれだけの人員で何年かかるか、編纂費はどれほどいるのか、印刷費はどれほどかかるのか、まるで見当もつかなかった。また、大陸では中華人民共和国という新中国が生まれ、社会も経済も人の心までも大変革があり、文字改革が行なわれたことなどで、辞典の完成期は見当をつけ難かった。

愛知大学は創立後日なお浅く、困難な大学財政から編纂資料費の予算、専任教授、講師を除いた編纂専従者の人件費等の支出を要し、兼務者は無報酬、専従者に対しては失礼なほどの薄謝しか差上げられなかったのではあるが、辞典完成の昭和四十三年まで三年間の編纂費の支出は、相当な額に上ったはずである。これに対して大学評議会や図書費の不足をかこつていた教授たちからは、われわれにとつては耳の痛い不協和音が発せられたようであった。本間先生はその間苦勞されたことと思われるが、その政治力であまりの騒音にはならなかった。

このような苦境を救ってくれたのは、朝日新聞社、中日新聞社、地元の実業家石原氏などからの応援であり、また貧者の一燈であると称して少額ながら二名の匿名の特志家からの心あたたまる応援をいただいたことであった。

編纂業務は前述の兼務編纂員、専従編纂員によって進められたのであったが、もともと人員も少なく、中国文字改革の完全吸収などのこともあって、発足以来出版まで十三年の長期間を要したのであった。編纂に従事した人人の氏名は中日大辞典の「編者のことば」に詳述してあるのでここでは省略する。

編纂業務の進行は、前述のような中国の変革があつたにかかわらず、それを知る資料の入手はかなり困難であり、そのために問題解決に時間を要したことたびたびであった。簡化漢字の母型二千余の製作も必要になった。これら予想外の労力と時間および費用を要した。

### 四、中日大辞典の出版

以上のようにして、この辞典は作業開始から十三年にしてはじめて「中日大辞典」として世に出た。後に、ある書物に「中日大辞典という小さい辞典にはかくかく」と好意的ではあるが皮肉な引用があつた。われわれが敢て「大辞典」としたのは、他は「中日辞典」があるのでそれらとの区別のために敢て「大」字を用いたに過ぎない。

いよいよ印刷ということになっても、印刷所は中国文の印刷には慣れていない。中国語の簡化漢字が親字とされている場合には、旧繁体字、異体字までも併記し、さらに標音には新たに制完された「漢語拼音方案」によるローマ字を用い、ローマ字一音節ごとに声調符号をつける等、普通の日本語の印刷くらべ、たいへん面倒なものである。その



ため附録まで含めた二、一二一頁の印刷に一年十か月を要し、いよいよ出版されたのは編纂開始以来十三年後の昭和四十三年二月であった。

##### 五、思い出

上海時代に作った辞典カードは未整理の粗資料であったが、実質的に返還されてわれわれの手にかえって来たということは、たいへんな励みになったが、「中日文化交流のため改めて日本人に贈与する」として贈られたことは、われわれの手でどうしても改めて立派にやりとげねばならない重い責任を負わされたことであり、あたかも改めて責任を追及されたような気の重いことでもあった。幸いなことは、編集スタッフに適材を得たことであった。

十三年といえは相当の長い時間で、「夜長夢多」といわれるとおり思い出は少なくない。編纂作業の最初の見当は六か年であったが大幅な見込みがいだだったので、「編纂の仕事が楽しいんだろう、いつまでつづくかわからんぞ」とか、事務局長からは「編纂室はいつかえしてくれるのか」と毎年の催促、こちらは「もう一年」という毎年の返事、局外者からはわれわれのらりくらりとやっていると見えたのかも知れない。

編集も進んだ段階では、いちばんの重要問題は印刷費をいかに調達するかということであった。大学評議会はこの辞典を創立二十周年記念事業とするとしながら、いよいよという時に印刷費の三分の一あまりの支出しかしてくれなかった。わたしには金の調達能力などはゼロだったので、半分捨て鉢で、いい原稿を仕上げておけばそのうちに何とかなるさと思っていた。

ところが本間先生は平生は時々編纂室へ顔を出してわれわれを激励して下さったばかりではなく、書院大学最後の学長として、書院大学最後の未完事業である辞典編纂は、先生の書院大学に対する最後の責任であるとして居られ、印刷費調達にも早々から熱心に奔走して居られたのであった。最も望みをかけて居られたのは平凡社社長との話合いであったようだが、あたかも老社長の死去のため御破算になった。

本間先生は東京商大出身某氏の仲介で日通社長福島敏行氏に連絡ができ、その御好意で多数の予約を前金でいただき、前記の愛知大学からの援助金と合せて印刷着し金を得、印刷にとりかかることができた。その後、朝日新聞社、毎日新聞社からも多数の予約をいただき、この分は中国貿易友好商社からの予約二〇〇冊を加え、一、二〇〇冊として、中国のこの辞書に対して与えられた好意に報いる意味で中国の各大学へ一千冊、対外貿易機構へ二百冊を寄贈した。

印刷に関しては図書印刷株式会社に、印刷交渉、発売に関する一切は株式会社大安（現在の燎原書店、四十二期小林実弥君経営）に依託し、すべては大体順調に経過した。

この中日大辞典の完成は上海時代に手をかけて下さった人人の努力、日中両国の友好協会の御好意、愛知大学における長期にわたる関係者のご尽力、本間先生、小岩井先生の熱意、本間先生の周密なる御配慮の賜物であった。この辞典の編纂は、その目標を達

成して、日中両国人民の附託にこたえることに在ったが、その目標に達し得たか否かは、要望の寛赦にもよるが、われわれは一応こたえ得たと思っている。

昭和四十八年六月われわれ辞典関係者四名が中国天津市南開大学から招待を受けて訪問し、この辞典に関する有益な批判を、三日間にわたって受けた。北京大学、上海復旦大学においても同様であった。中国人も日本語研究のため、この辞典を利用する人が少なくないとのことであった。

辞典の思い出にも実に遺憾な思い出もある。この編纂を開始して間もない頃であった。原稿カードを愛知大学へ持って行ったのは愛知大学の強盜的行為であると、滬友会役員会が全会一致で決議したことであった。この原稿カードはもともと愛知大学が正当な手続を経、関係者および日中友好協会の依頼を受け、多大な困難を覚悟し、日中両国民の附託に応えることを決心した上で引受けたものであった。当時の滬友会は、あたかも中国の「四人組」の跋扈の如き理事長の横暴を許していた。愛知大学は理不尽な漫罵に耳をふさぐことはできなかった。わたしは愛知大学およびわたしの名譽のために、雑誌「滬友」に投稿して理事長と論戦したが、理事長はついにわたしの文章の登載を拒否した。わたしは役員会決議に対する反駁と抗議のため。昭和三十一年十月わたし個人の意思でプリントを作り、滬友会役員会構成員へ送付して抗議し、同時に各支部へ五部づつ送って批判を仰いだ。これに対し数人の同窓からはわたしの主張を支持して下さる手紙もいただいたが、反対意見はなかった。滬友会役員会および役員からは何等の意思表示もなかった。

さらに同じころ、もうひとつ不愉快な思い出がある。それは原稿カードを東京へ持って行き、そちらで完成するという詭計を執拗にもちかけられたことである。この辞典を東京で編纂するということは、愛知大学は前述の附託に応えられず、責任を放棄することであつて名譽にかけて許し得ないことであつた。

#### 六、将来への展望

星霜は移り、この辞典出版後すでに十二年を経過している。最初にこの辞典を編纂した時は中国の社会・文化は、革命前とはたいへんな変化であつた、しかも、中国の資料は入手困難であり、訪中も容易ではなかった。現在は革命前と後とのような差はないが、文化大革命は意外に大きい変化をもたらした。かの地における中国語研究も進み、辞書・参考書の出版も少なくない。これらの変化や研究成果を取り入れ、この中日大辞典の内容を充実し、広さ・深さ・重さを、発展増大しつつある日中関係に適応し得るものとしなければならぬ。前述の南開大学など中国三大学における批判・研修なども、そのために利用しなければならぬ。わたしは昭和四十九年三月胃切除という応急処置で危機を脱し、数年余命をのぼし得たので、本職を辞し、わずかに残された余命を以て、専心増改訂に当ることになっている。専従者はわたしと台湾の国立師範大学出身の有能な女性とだけであるが、教授・講師諸氏もよく協力下さっている。二名の中国人客員教授・

講師は大新聞社で記者をされた経験があり、文学にも造詣深く、そのうちの一人は最近まで人民日報の記者をされた人で、お二人とも辞典増改訂には最適任の人で、立派な成果が期待できる。ただ、さらに多数の人材を聘し得ないのが残念である。増改訂の一応の完了予定は昭和五十六年である。

〔注〕遺稿。一九七八年前後、「滬友」への投稿予定原稿。

## 大中国語辞典を出版する愛知大学華日辞典編さん所長、教授

すず き たく ろう  
鈴木 択 郎

三十二年間をかけた二千六、十三万語の「大中国語辞典」が出版される。現在出ている一番大きな辞典が七万語というから、ざっと二倍。鈴木教授が半生を費やした努力の跡が十三万語の一語々に刻みこまれている。

「昭和三十一年、中国新政府が行なった文字の改革にはとまどいました。なにしろ簡化文字や表音文字がぞくぞくつくられるし、異読語は大整理されるし……」と苦勞を語るが、口調はあくまでひかえめ。根っからの学者なのだろう。このため昭和三十三年、中共の国語学者に新しい文字の知識を教えてもらいにかけて。

「北京大学聴講生のころ『阿Q正伝』で有名な魯迅の講演がさっぱりわからなかったことが中国語研究に一生をささげるきっかけになった」という。辞典の編さんを手がけたのは昭和八年、上海の東亜同文書院教授のころ。終戦直後まで同書院の日本人教授六人、中国語講師五人でせっせと単語カードの作成をつづけ、十四万枚できたところで敗戦、押収された。このときはガツクリきたそう。

さいわい昭和二十九年、中共の保衛世界和平委員会の好意で全カードがかえり、今回の大辞典実現の運びとなったわけだ。

教え子の今泉潤太郎同大学助教授らと最後の索引カードを整理中だが「来年六月出版しても増補改訂に一生追いまくられるでしょう」と辞典完成のむずかしさをのぞかせた。明治三十一年、栃木県生まれ、六十七才。（松本伸夫）

〔注〕毎日新聞「談話室」 昭和四十年四月二六日所載。

## 中日大辞典編集終る

中日大辞典出版の報告とお願い

愛知大学 鈴木沢郎

この中国語辞典は昭和二十九年十月中国から贈られた原稿をもとにして編纂されたものであります。その原稿は三十数年前から東亜同文書院で手にかけて来たものが、敗戦の際中国政府へ接收されたのでした。その当時の責任者であり、後の愛知大学学長本間喜一氏の熱意、故内山完造氏の斡旋、中国科学院長郭沫若氏の好意により、この原稿カード約十四万枚は「中日文化交流のため、之を日本人民に贈られる」こととなり現品は昭和二十九年十二月日中友好協会を通じて愛知大学へ引渡され、そこで完成されることになったのであります。愛知大学はその事業としてこの辞典の編纂にとりかかることとなりもともと東亜同文書院大学においてこの辞典の発起者であり推進者であったわたしを編纂委員長として元東亜同文書院大学予科教授内山雅夫氏、北京の中国大学国文科卒業の張祿沢女士および老練な専門家数名を聘して専任編集員として昭和三十年四月発足し、四十年三月一応脱稿ということになりました。この間まるまる十一年の日子を費やしたのであるが、それはこの事業の質、量ともに簡単なものではなかったのに専従者の数が少なかったことが主な理由であり、また一方には中国の社会変革による言語の変化に順応すべくできるかぎり意を用いねばならず、また雄大な国語政策としてつぎつぎにあらわれた改革や整理を完全に吸収するなど多くの手数を費やさねばならなかったこともひとつの理由であります。かくして、いま原稿は一応脱稿するまでになり、B6版（岩波基本六法と同型）二千ないし二千三百頁、収録語数十三万語（現在ある他の類書の二倍以上）、注釈は懇切にし、例文を多くして理解しやすくし、中国の文字改革を完全に取り入れてあり、印刷には約一年を要し、出版は四十一年六月頃の予定です。この辞典は「日中文化交流」にいささか寄興することができ、日中人士の期待にまずまずこたえることができようかと思つて居ります。

この種辞典は印刷費が高くつき、出版には多額の費用がかかるので、容易に出版に踏み切れず、本間先生は非常に頭を悩まされたようでしたが、このほどある方面からある程度の資金の援助を得られ、さらに愛知大学の援助により着手金の調達をおわり、出版に踏みきることができました。今後は納本と同時に支払われるべき一十余万円を如何にして調達するかが問題であります。愛知大学は勿論十分な配慮はして下さるが大学にこれ以上迷惑をかけずにこの出版を完遂しなければならぬと思つて居ります。それにはなるべく多くの予約を獲得することだと思つるのでこの方面で同窓諸君のご援助を願えば幸に存じます。また、本間先生が熱心に考へて居られることであるが、それはこの辞典の千部乃至二千部くらいを中国へ贈りこの辞典の完成を報告し、原稿カードを贈

つて下さった中国に対してその好意を謝したい、というのであります。その資金は特志家にお願しなければならぬことであろうが、また一般人士の好意の結果も意義深いものがあると思います。

(四〇・六・七)

わが同窓会の会長伊藤公氏は中国の招待を受けて国際法律家協会のメンバーとして、八月十五日出發される。一行は一箇月の予定で各地を歴訪する。この他、中国と関係が深い愛知大学ゆえ、氏に対する注文も多く、中日大辞典の話やら、交換留学生実現の下交渉などその準備に多忙を極めている。

また、同窓会でも激励の歓迎会を盛大に開くべく副会長が發起人となって準備をすゝめている。

会員多数の参加をお願いします。

記

日時 八月十一日午後六時

場所 名古屋校舎新館地下ホール

会費 五〇〇円

〔注〕愛知大学同窓会会報第十一号（昭和四十年八月一日）所載。

## 鈴木扨郎先生の栄誉 叙勲祝賀会開催

本間名誉学長も激賞、不朽の労作、中日大辞典の編纂

愛知大学名誉教授鈴木扨郎先生の勲三等瑞宝章叙勲祝賀会は、十一月十九日豊橋グラインドホテルで先生ご夫妻出席のもと、愛知大学主催の形で、百余名の参集を得て盛大に開かれた。滬友会からは田中会長の代理として上野事務局長が出席した。本間愛知大学名誉学長は、祝詞の中で、鈴木先生が、上海からの引揚げにあたって、自分の物を持ち帰るのも割いて、大きなトランク三ツ位に入った学籍簿・成績表を持ち帰られたご苦心についての披露があった。鈴木先生の最大の業績は中日大辞典の編纂であるが、これは永く歴史に残るもので、日中の友好と文化交流の為に果す役割はいかに高く評価しても過ぎるものではない。参会者一同改めて、先生のご苦心を思い、祝賀会の雰囲気は一層盛り上った。

〔注〕こゆうニュース 第四三号（一九七七年十二月）所載。

## 愛犬太郎とバンザイ電報

越 知 専

もう一つ面白い話があるんですが、昭和四〇（一九六五）年、本間先生は勲二等の勲章をいただいた。

しかし「おれは要らんよ」って犬にくれちゃった。これは大変国に対して失礼なのかもしれないけれども、本間先生には他の先生が頂いていないのに、という気持ちがあった。

愛知大学はゼロから始まって寄付や市の援助でできた大学でしたのでお金がありませんでした。そのため経営が不安定で、給与も出なかつたりしました。そこで先生方の中には、言い方が悪いかもしれませんが、国立大学の方が給料の取り損ないがないとか、そういう理由で愛知大学から国立大学に行った人がいました。そして一〇年たち、二〇年たつと、そういった先生方は業績や年数を評価され国から勲章をいただける。その場合、どうしても国立へ行った先生の方が先にもらってしまうわけです。

愛知大学には『中日大辞典』を完成させた鈴木擇郎先生がいます。

鈴木先生は上海から引き揚げるときに、長い年月をかけて作ってきた辞典の原稿カードを没収されてしまいました。そのような中で自分の身の回りよりも東亜同文書院の学籍簿や成績簿、そういうものをご家族とともに手分けして持ってきたばかりか、豊橋に新しい大学を創るんだという本間先生の心意気に惚れて頑張ってきた。

本間先生は、『中日大辞典』の原稿のカード十四万枚が、中国で保管されていることを気にかけておられ、「中日大辞典をつくりたいので、ぜひ愛知大学に返してください」と中国側に要望します。昭和二十九（一九五四）年に両国の友好のためにと返還され、再び編纂事業を始める事ができます。鈴木先生を中心とする編纂グループは、返還されてから更に十三年の年月をかけ、昭和四十三（一九六八）年、ついに中日大辞典を完成させます。毎日新聞はこの辞書の出版によって「日本は中国に関して世界の学会に誇りうる金字塔を建てた」と賛辞を送ります。

昭和五十二（一九七七）年、鈴木擇郎先生が勲章をもらえることが発表されると、鈴木先生の元に本間先生から電報がとどきます。これがその電報文です。

「バンザイ・キガセイセイシタ ホンマ」

これしか書いていません。

「万歳 気がせいせいした 本間」。

一応お祝いの電報として鶴と亀の絵がつけてありますが、なんだか怒っているようにも思える。配達の人にも、これはお祝い電報か何か、文がわからない。わからないけど、まあ、一応お祝いの電報にしておくと鶴亀の電報にしてきたそうなんです。



鈴木擇郎先生は、私がいつも頭を刈っておりましたので、お店に来て言うわけです。「越知君、本間先生からの電報が、よく意味がわからん。勲章をもらったからお祝いだと思うけど、万歳、気がせいせいした、とはどういうことだろうか、僕は直接聞けんから、君、今度頭を刈りに来たら本間先生に聞いておいてくれ」というものですから、私が聞いたわけです。

そしたら、本間先生曰く「同文書院や京城帝大から帰国した先生方が愛知大学へ一旦来た。ところが新制大学など愛知大学以外に大学がたくさんできると国立へ移ってしまった。その人たちはもう五年も一〇年も前から勲章をもらっている」。

だから本間先生は、遅い、遅すぎると。国家は何だ。私立大学を低くみておるのかといつもやきもきしていた。それで、『中日大辞典』というような立派な書物を発行した鈴木先生に対して勲章を発行するのが遅すぎると。だから、「よかつたな、万歳、これで僕も気がせいせいした」という同僚思い、部下思いの心情がこもった本間先生の言葉であつたと分つたわけです。

〔注〕『本間イズムと愛知大学実例編』（愛知大学東亜同文書院記念センター）

二〇〇九・七）所載。

### 内山雅夫君（三四期）は正義・責任感の強い人だった

日本敗戦後間もない頃のある日、上海で旧制一高のつつましやかな同窓会が開かれた。集まった人は二十人ほどであった。そのうちに東亜同文書院大学長本間喜一氏もいたし、応召の若い士官もいた。本間氏は「日本兵のように横暴なことばかりしていたのでは、中国で人心を得ることはできない。」といったら一人の青年将校は次のような抗弁をし、日本兵にもこういう人が居ると誇らかに次のような話をした。

「南京で、ある部隊が中国の旅館に宿営することになった。その部隊のある二等兵は中国語も堪能であったが、部隊と旅館側との間に十分な意思疎通をはかり、誠意旅館を保護した。旅館の主人はこの二等兵の誠実に感動し、是非婿になつてもらいたいと懇望した。この二等兵は日本に親も妻子もある身なので、それはできないと断つた。この人は上海で復員したのだが、そのときは親戚一同が集まって盛大な送別宴を開いた。いよいよ上海を引揚げたときには、わざわざ上海まで出て来て見送つたとのことである。」

本間学長は大学へ帰つてこの話をしたら、その二等兵は内山君であるということを知らされた。この話は中日大辞典出版記念講演会の時本間氏の口から公開発表された。以上の談話が真実であることは、わたしからじかに内山君にたずねて確認することができた。

これはまた中日大辞典の話になるが、内山君の同期のある人は「内山君が加わるなら必ずいいものができるだろう」といったとのことである。

以上のことから見ても内山君の誠実と正義感・責任感の強いことがわかる。師友間に敬愛されていたのもゆえあるかなである。

内山君は一にも二にも、教師たることを天職と信じ、これに全力を傾注することがその人生のすべてであるという信念を持っていたと思われる。その生涯を通じて、やむを得ずして過した数年以外は、若くして上海日本居留民団立商業学校教諭をふり出しに、東亜同文書院大学予科教授・愛知大学教養部教授として、ほとんど全生涯を教師として終始された。

強い正義感・責任感を以て世に処すれば、憤りを感じることは必至であるが、君は憤りを内におさえて言動に発することなく、責任はいささかなりとも尽さざるところあらんことをこれ恐れていた。かくして君は己れを持つこときわめて厳であった。これが君の健康によくない影響をもたらしたことも否み得ないように思われる。君が入院したのはわずかに二十日間にして不帰の客となつた。まことに痛恨にたえない。愛知大学としては、中国語主任教授として一層の活動を期待していた。君の他界は大なる損失であり打撃である。また滬友会としては円熟した中国語学者としての会員を失つたことであり痛惜にたえない次第である。謹んで冥福を祈る。

昭和五十年八月五日

愛知大学名誉教授 十五期 鈴木 沢郎

〔注〕こゆうニュース 第三五号（昭和五十年十月）所載。

## 生涯かけた「中日大辞典」

## 鈴木柾郎愛大名誉教授を悼む

愛知大学は、かけがえのない人を失った。『中日大辞典』の編さん者・鈴木柾郎名誉教授が、寒波厳しい六日朝、不帰の客となった。毎年、鈴木教授からいただく賀状には流麗な文字で中国の吉祥句がしたためられていたが、この新年には賀状が見当たらなかつたので「もしやご健康がすぐれないのでは」と不安を抱いていたところへの訃報（ふほう）だった。

四十三年二月のある日、鈴木教授から「できましたよ」と知らせを受けた。はずんだ声だった。訪れた研究室では、出版社から届いたばかりの『中日大辞典』第一号を胸に抱くようにして教授が待っていた。生まれた赤子を慈しむように一ページ、一ページとめくり、中国語を知らない私に簡化字のこと、辞典のひき方や特色などを丁寧に教えてくださった。辞去するころ外はとつぷり日が暮れていた。

鈴木教授が八十二歳の全生涯をかけたこの辞典は、教奇な運命をたどって世に出た。辞典づくりは昭和八年、東亜同文書院（上海）で日中両国人の共同研究で着手されたが戦争で中断、約十四万枚の資料カードは中国側に接収された。が、資料カードは郭沫若氏の計らいで二十九年、引き揚げ船「興安丸」に託されて愛大に寄贈された。翌年から辞典づくりが再開された。

編さんが進められていた当時の日中関係は、現在の日中友好ムードから見ると信じられないほど疎遠だった。中国国内では文化大革命が進行して新造語が次々と生まれ、中国語自体が大揺れだった。内外ともに険しい環境にあったが、鈴木教授は「日中友好の日は必ず来る」と信じて辞典編さんに励んだ。

愛大学長室には郭沫若氏の「激濁揚清」の額が掲げられている。郭氏が愛大の辞典編さんを励ますために贈った墨跡であり、鈴木教授はこの墨跡に心酔していた。その郭氏も、東亜同文書院時代からの協力者だった内山雅夫氏も、すでになく、いま、鈴木教授も世を去った。鈴木教授は「辞典に完成品はない」の信念を持って、初版いらい充実に努めてきたが、中日大辞典の偉業は不滅であるし、愛大建学の精神が生きているかぎり、鈴木教授の遺志をついで改訂作業が続けられていくに違いない。

（加藤 龍明記者）

楊石先南開大学長の弔電

## TELEGRAM

NIPPON TELEGRAPH AND

TELEPHONE PUBLIC CORPORATION

R.No.	Out	Office No.	Sent
446		40	
TRB439 CJA428 OPF0070 XBS507 X2019 JPJX CO			
CNTJ 050 TIANJIN 50 14 1800			
愛知大学 久曾神昇 大学長			14-1'81付 消印
TOYOHASHI			
驚悉鈴木擇郎教授不幸逝世，深表哀悼拜 向其家屬至以誠摯的慰問南開大学校長			
楊石先			

received 2115 20

## 中日大辞典編纂の大事業

加藤勝美

東亜同文書院と愛知大学とを結び付け、愛大において後世まで語り伝えられる文化事業として『中日大辞典』があり、その歴史は鈴木擇郎の存在を抜きにしては考えられない。鈴木は明治三十一年（一八九二）、栃木県芳賀郡清原村の農家の生まれ、小岩井の一つ下になる。書院の商務科を卒業したのが大正七年（一九一八）、これはロシア革命の翌年、米騒動の年に当たる。

「中日大辞典はいつ頃、どうして完成し出版するかというはつきりした見通しはなく、ただ、できるだけのことをやっておきさえすれば、必ずなんとかなる、という漠とした自信だけであった」（『中日大辞典の思い出』『滬友』昭和四七年一月号）。着手したのが昭和八年（一九三三）頃だが、「時局は日中戦争の泥沼へ踏みこんだところで、中日合作に基盤を置いたこの仕事は大影響を受け」、長い間「断続・停顿」した。注目すべきなのは、鈴木が「日中合作に基盤を置いた」としている点である。日本の敗戦によって、それまでに作られた「華日辞典カード」約一四万枚（七〇八万語）が国民政府に接收された。その引き渡しに際して鈴木は、「将来、事情が許すようになったら、われわれに完成させてもらいたい」と要望したが、他方で、辞典の責任から放棄されて、ほったした気持ちもまたあった。

鈴木は愛大設立と同時に予科教授、昭和二四年（一九四九）には教授となったが、辞典のことはすっかり忘れていた。しかし、この年一〇月、中華人民共和国が誕生すると、学長の本間は「原稿カードがもし残っていたら愛知大学の手で完成させて日中友好に役立てたいという考えを鈴木先生や小岩井先生に相談されました」（今泉潤太郎『中日大辞典と私』。愛大現代中国学会『中国 21』VOL.18）。本間や小岩井の熱心な勧めがあった、敗戦で接收されたカードの返還を中国に願い出ることになった。これが昭和二八年頃のことだが、先の接收委員鄭振鐸は新中国の文化部副大臣となっていた。この鄭に手紙を出したいと思っても新中国とは国交がなく、手紙を出す手だてがない。ただ、中華人民共和国が成立した九日後の二四年一〇月一〇日、東京で日本中国友好協会準備会が発足、一年後の五〇年一〇月一日に日中友好協会が設立され本間も理事の一人になっていた（大阪支部設立は二七年一〇月）。

興味深いのは、愛大創立の翌年に小岩井の提唱で学内に作られた国際問題研究所は実質的には中国問題研究所であり、しかもその中に日中友好協会豊橋支部が出来ていて、支部長は小岩井だった。しかも、協会発足四ヵ月前の六月に朝鮮戦争が始まり、一〇月二五日には抗美援朝の中国人民義勇軍が参戦して、occupied 日本にあっては協会はアメリカの「敵対的、敵性的な団体」（今泉前掲一八一ページ）だったが、「日中間に

正式の国交のない間、唯一の民間外交を担った組織として中国側にも認知されていた」(『五十年史』二八七ページ)。さらに昭和二十七年一月に新華社が中国在留日本人の帰国援助方針を発表、翌二八年一月に日本赤十字社、平和連絡会とともに訪中した日中友好協会理事長内山完造からじかに、中国科学院院長郭沫若に愛大の意向が伝えられ、中国側から、『人民中国』編集部宛て要望書を出すよう助言があり、同年七月、本間学長名で原稿カード返還要望書が郭沫若、鄭振鐸の二人宛に内山を経て提出された。

こうして、翌昭和二十九年四月一〇日、中国人民保健世界和平委員会秘書長の劉貫一の名で内山理事長宛に手紙が届いた。「この辞典カードは敵産として没収したものであり、本来ならば、おかえしできないものであります(略)文化交流の賜物として日本の方々到我が会からお送りするものです」(『五十年史』二八八)。カードは鄭振鐸のもとにあり、引揚げ船興安丸を利用してこの年の九月下旬、日本に届いた。これ以前昭和二十九年(一九五四)七月に、旧東亜同文書院大学学長、愛知大学学長の肩書で本間が書いた「華語辞典編纂顛末」と題されたコクヨ便箋三枚が〇七年一月に殿岡晟子宅で見つかった。これには書院時代の辞典編纂の意図から始まってカードが返還されるまでの経緯が簡潔に記されている。以下はその全文。

東亜同文書院華語担任教授等は優良な華日辞典の出版されないことを憂いていたが、いよいよ自らの手で之を完成せん事を期し、東亜同文書院華語担任教授、助教授、華人講師全員(時期により不同であったが、大体十一、二名)で之に当ることとし、資料の蒐集にとりかかった。

実施方針は、東亜同文書院において華語を担当する教授、助教授、講師はすべて、華日辞典編纂に従事すべきことを申合わせた。学校当局よりは、この事業のため特に専属日本人事務員一名を与えられ、研究室の提供を受け、カード、カード整理箱、文具等の消耗品の供給を受けた。

資料は先ず日支両国の華語に関する辞典に材料をとり、更に動、植、鉱物辞典、百科事典、新聞雑誌、文芸作品、華語教科書等にわたって取材した。昭和十五、六年頃時局緊張のため一時工作が停頓したこともあるが、十八、九年頃出版に関して種々の意見が現れ、結局、この種のものには性質上完全を期することは不可能であるから、現有のうちでは最良のものであるとの自信を持てる以上、この辺で一応整理出版すべしとのことに落ちつき、一部ものは整理にかかり、一部ものは更に蒐集をつづけ、昭和二十一年頃までには全部整理を終る予定であった。昭和二十年終戦時において、原稿カードは約十四万枚であったが、一語でカード数枚にわたるものもあり、また同一語が数枚にわたって重複しているものもあるので、実際の語数は十万語余りであろうと推定される。

終戦時、このカードを引渡した時、将来可能な時機が来たらわれわれに完成させてもらいたい旨を接收委員鄭振鐸氏に申し出ておいたので、今回日中友好協会を通じて返還を申し出たところ、贈与という名目で返還されることになった。

こうして昭和三〇年四月、華日辞典編集委員会が作られて、学内の建物の一つに「華日辞典編纂処」の看板がかけられて、委員長に鈴木擇郎が就任、同年七月、華日辞典刊行会が設立された。しかし、愛大はゼロから出発してようやく十年目の貧乏大学、金はあるか？鈴木「思い出」には、「貧弱な愛大の財政から支出することに決定するの、評議会説得に本間先生が苦勞されたことであろう」、「いいものさえ作っておけば何とかなるという呑気な考えをもって居ったものの資金調達能力はゼロなので、資金調達は一切本間先生にお願ひし」とあって、本間の存在の重さがここでも感じられる。編纂処発足と同時に編纂処専任者の一人となった今泉潤太郎(当時愛大嘱託、昭和七年生まれ)によると、この刊行会は日中文化交流のため辞典を発行する、そのために学外から財政的援助をもらおうというもので、中国関係の著名人、書院出身者を顧問、評議員とし、学外に開かれた組織として立ち上げられたという。

この刊行会が資金の大半を学外から募り、その実績をもとに大学が印刷費の不足分を負担する形で刊行を後押しした。「出版に関してそれを支えたのは本間先生といつていいと思います」(今泉前掲一七九)。

しかし、編集作業は順調には進まなかった。苦心の末返還してもらったカードを点検すると、「このまま使用できるものは皆無に近」く、「二十七年の歳月は中国語をとりまく環境を変えたばかりか、中国語そのものも一変させてしまっていた」(『五十年史』一九三)。例えば、「階級」という言葉はかつては、ア、カの用語であったし、「儲かりますか」という日常語もない。帝国主義、搾取、解放軍は共和国成立後には必須である。辞典は現代中国を多面的に深く理解するための参考書と位置づけ、可能な限り一次資料から語を採用し、中国小百科事典の性格をもたせることとした。

この極めて良心的な方針によって編集期間は予定の二倍になり、大学財政の逼迫も加わって、経費節減のため編集部員は半減し、鈴木、内山、張、今泉の四人のみとなった。今泉たちは「編纂の仕事をしないうちが授業」(今泉前掲一八二)というやり方で編纂の仕事そのものは無給だった。「事務当局からは辞典編纂処の建物の明け渡し、完成時期の明示を求められるなど、編集開始以来ずっと夏休み・冬休み返上で努力してきた編集メンバーにとって気の重い時期もあった。本間氏はすでに名譽学長になっていたが、来学時には必ず編集メンバーを励まし、辞典の進捗に関心を持った」(『五十年史』一九五)。昭和四〇年(一九六五)、一応脱稿した。この間の事情は今泉によると、スタッフ数と勤務時間の制約がある一方、現代中国の学術研究の成果を反映させようとしたため、新しい成果が出てきりがなく、字体も簡化字の採用とそれに付随したものが出てくると、それら全部を取り入れる。それで基礎作業だけで十年かかった。さらに、校正の段階では同時並行で最後のページの原稿を送り込むことになるが、その間、新たな資料が中国側で次々に出る(今泉前掲一八三)。印刷に当たっても簡化字の字母を作らねばならない。活版印刷だから鉛で母型を作るのだが、職人が和紙に掌程の大きさの字体を書いて、



それを写真に撮って機械で彫る。その数六、七千字、そのコストを図書印刷会社が「日中友好のため大サービス」をして負担してくれた（今泉前掲一八六）。こうした表面に現れない苦労は効率重視の「事務当局」には見えないものだ。

印刷を開始して二年一〇カ月後の昭和四三年（一九六八）二月一日に出版、初版一萬冊が大安（総販売元）から発売された。この間に小岩井が亡くなり、薬師遭難（後述）と本間の学長辞任があり、愛大事件第二審の審理がつづいていた。辞典は、当時としては最大の規模になると予想され、あえて『中日大辞典』と命名した（『五十年史』二九五）。初版の鈴木による「編者のことば」には書院で語彙蒐集に当たった者一人（鈴木、熊野正平、野崎駿平、坂本一郎、影山魏、岩尾正利、内山雅夫、山口左熊、木田彌三旺、金丸一夫、尾坂徳司、ほかに中国講師八名）の名を挙げて「労を謝」し、本間の「熱意によってはじまり、御配慮によって完成したもの」と述べ、最後に小岩井が「窮屈な財政の中から編纂費を支出」し、終始編纂員を激励した尽力に謝意を表している。世評は高かった。発刊翌月の『朝日ジャーナル』三月一七日号で実藤恵秀・早大教授が「かねて予告を知っていた読者からいえば『千呼万喚はじめて出で来れり!』というところであろう」と、丁寧かつ好意的な書評を書いた。実藤（明治二九・一八九六年生まれ）は大正以後の七冊の辞書と比較をし、語数が、最大と思われる旺文社の「華日大辞典」（一九五〇年）が八万未滿に対し『中日大辞典』は十三万余りで、そのような大きな差が出る理由について、「三大規律」など政治用語が新中国でつきつきに出て、それを念入りに集めていること、数詞は、一枚の紙を「一張紙」、一つの爆弾を「一枚（または一顆）炸弾」などと表記し、日本語と違う数詞が多く、名詞にはその語に付く量詞を示す親切が初めてなされているからだ、と説明している。

また、一九八九年九月刊『言語学大辞典』（三省堂）第二巻では、橋本萬太郎が、中国人以外が編んだ中国語の二言語対照辞典で「今日の用にたえる」ものとして『マシューズ中英辞典』（一九三二、上海）と『中日大辞典』を挙げている。「これまで日本語で出たものとも広範な辞典。語彙の選択には少し首を傾げるようなところもあるが、原資料から採録しているので、他人の辞典をひきうつしにした辞典にない確かさをもっている」（九〇五ページ）。傍点（引用者）部分は鈴木たちの仕事に対するものとも確かで本質的な評価であろう。

刊行五年後の昭和四八年（一九七三）五月、当時の学長、久曾神昇宛て、中国の南開大学から電報が届いた。それは国務院科教組から南開、北京、復旦の三大学へ愛大代表団を受け入れたいという招聘状であり、学術訪中団として教授の鈴木擇郎（団長）、助教今泉（秘書長）、教授の池上貞一、助教授の中島敏夫四人の派遣が決まり、愛大の本格的国際交流の嚆矢となった（『五十年史』三〇二）。

この国際交流ということ言えば、華日辞典編纂処開設の年、一九五五年一二月、中山大副学長の馮乃超が豊橋にやってきた。この時期、日本学術会議の招きで郭沫若中国科学院長を団長とする中国初の訪日学術代表团が来ることになった。国交未回復の時期

の民間外交だったが、郭が辞典カード返還の恩人なので、日中友好協会を通じて愛大への招聘を計画した。しかし全国各地で引つ張りだこの郭に、その時間的余裕がなく、代わって馮が来学することになった(彼は旧制八高、今の名古屋大学で学んだ)。「これが愛大にとって最初の国際交流事業となり(略)豊橋駅前で市民の歓迎集会が開催され(略)思いがけない展開」となったという(今泉前掲一八四)。

なお、郭沫若たちに通訳として随行した劉徳有は後に、「郭沫若・日本の旅」(村山孚訳、サイマル出版会)を執筆したが、各所の歓迎会の参加者のなかに細迫兼光、川上貫一、杉山元次郎(六六ページ)や実藤恵秀、愛大教授林要(八五ページ)の名があり、また代表団が日本に到着する前日、一月三〇日に大山郁夫が亡くなり、一月二日、郭沫若は新宿戸塚の大山宅を弔問している(八八)。郭は一八九二年生まれ、本間喜一の一つ下になる。

豊橋市長を務めたことがある河合陸郎の『河合陸郎伝』(昭和五七年)には、本間の口述筆記による「想い出」(五一八ページ)があり、それによると、辞典編集部に掛かっている郭沫若の揮毫「激濁揚清」は、市長時代の河合が全国市長有志団体団長として訪中したとき、北京で多忙な時間を割いて郭沫若を訪問し、辞典編纂の経過を詳しく説明すると、ことのほか喜んで、この揮毫をし、河合に託したと語っている。

ところで、今泉は二〇〇三年三月に退官しているが、それまでは『中日大辞典』編集委員長であり、第一版の仕事に若手研究者として携わってから実に四〇年余も辞典とともにあった。退官後も第三版の編集主幹の立場にあるが、本書執筆中の〇八年七月、豊橋校舎で第一版編纂時の話を聞いたとき、編集主任だった内山雅夫の存在の重要性を語ってくれた。内山は書院三四期生(一九三四年入学)で東亜同文書院の中国語教授で、辞典編纂業務ではマネジメントの中軸となった。今泉が豊橋校舎の「書院研究センター」の棚にある『滬友ニュース』の綴りから探し出してくれた三五号(昭和五〇年一月)には鈴木擇郎が執筆した内山の追悼文がある。

鈴木によると、昭和二〇年(一九四五)八月、敗戦の直後、上海で本間をふくむ旧制一高卒業生二〇人ほどの同窓会が開かれた。その時、本間が「日本兵のように横暴なことばかりしていたのでは、中国で人心を得ることは出来ない」と話すと、同席していた一人の青年将校が、次のように「抗弁」した。「南京である部隊が旅館に宿営し、中国語に堪能な二等兵は部隊と旅館の意思疎通を図り、誠心誠意旅館を保護した。主人はそれに感動し、娘婿になることを懇望した。彼は妻子があるので、それは断った。彼が復員するとき、その旅館の親戚一同が集まって盛大な送別の宴を開き、わざわざ上海まで出向いて見送った」。本間がその後、愛大でその話をしたところ、その二等兵は内山であること知らされた。本間は『中日大辞典』出版記念講演会でその話をし、鈴木が内山からそれが事実であることを確認した(内山は大正五・一九一六年生まれだから、敗戦時は二九歳前後になる)。辞典との関わりで言えば、彼の同期の人間は「彼が加わるならば必ずいいものが出来るだろう」と話したという。

本書四五―ページに記されている日本の編集者一人のうち、熊野、野崎、坂本の三人は内山が編集業務に当たるといふことで辞典編集を了承したほどだった(今泉談)。

鈴木は内山の人となりについて書いている。「強い正義感・責任感をもって世を処すれば、憤りを感じることは必至であるが、君は憤りを内におさえて言動に発することなく、責任はいささかなりとも尽くさざるところあらんことを、これ恐れていた。かくして君は己れを持つこと極めて厳であった。これが君の健康によくない影響をもたらしたことも否み得ないように思われる」。入院後わずか二〇日間での死であった。こうした内山は、その生き方や気質において、小岩井との類似性を思わせ、しかも同じ脾臓癌であり、小岩井が六二歳、内山は五九歳直前だった。愛大史の栄光の背後には、内山のような、あまり語られることのない死が数多くあるはずである。

このように内山の死を悼む鈴木がその二年後の昭和五二年(一九七七)秋、辞典編纂の功績によって勲三等瑞宝章を受け、鈴木のもとへ東京の本間から電報が届いた。「バンザイキガセイセイシタ」。国立大学の鈴木の本間代の多くが既に叙勲していることが、本間にはかねてから腹立たしいことだった。

その叙勲祝賀会が一月一九日に行われ、参加者百余名、名誉学長の本間が「敗戦による同文書院廃校、引き揚げの混乱時に、何物にもかえて学籍簿、成績簿を持ち帰った献身的な行為を称賛されるとともに、しづ江夫人の内助の功を称え」た(今泉記、昭和五三年一月一日『愛大通信』一四号)。会場は西ドイツのポツダム大学の張祿澤教授(愛大の前中国語教授)から送られた花束で彩られ、滬友会会長の祝辞、在北京同窓生の祝電などが披露された。

〔注〕『愛大を創った男たち』第五章「再度の学長就任から辞任まで」(二〇一一年三月愛知大学発行)より抜粋。